

特 集

膵・消化管神経内分泌腫瘍 (GEP-NET)のアップデート

“稀少疾患”“ガンもどき”“進行がゆっくり”…。神経内分泌腫瘍 (NET) を形容する言葉はどれも心もとない。良性とわかれば手術は不要、悪性ならば進行する前に手術は不可欠だが、日常臨床でどちらか迷うケースは多々ある。近年、NET の 5 年生存率が 60～80%、5 年以内の肝転移再発が 30～85% との報告がなされ、“小さければ良性”とか“進行がゆっくり”という表現が必ずしも正しくないことが明らかになりつつある。また、米国における NET 有病率は大腸癌を除く他の消化器癌のどれよりも多く、わが国の P-NET 有病率は米国の 3 倍近いという報告がある。この事実からすると、もはや NET は稀少疾患とはいいがたい。

WHO 分類 2010 では“転移したら癌”という 2004 年までの病理学的分類に代わり、細胞の増殖回転数を表す Ki-67 や核分裂像で表現するようになった。しかし、最も高率に発生する肝転移を予測する指標はいまだ見つかっていない。見た目は良くても本質は性悪な腫瘍、それが NET の正体である。現在、何がわかっていて、何が解明できていないのか。本特集ではそれを解き明かし、明日の外科手術の発展に寄与することを願う。